「当たり前だったこと　家族の顔が見えるということ」

介護老人保健施設アルファ俊聖　　芹田将人

　私はアルファ俊聖の支援相談員として勤務して３年になります。入所・ショートステイの窓口として、医療と介護の連携を肌で感じながら毎日忙しく業務に携わっています。

　当事業所は甘木中央病院の敷地内に併設した老人保健施設です。入所に関するお問い合わせの中でも、病院に入院中の方々からのお問い合わせは数多くあります。

入院されていた方々の多くは、このコロナ禍の状況で入院期間に面会を許されず、退院する日までご家族と直接会うことができなかった方々が多く、その後老健へ入所すると、また面会制限を設けられ、孤独と疎外感を感じておられる方々が数多くおられます。私たち支援相談員はそのようなご利用者様に対して、懸け橋となるような存在でありたいと思います。

これまで当たり前だった「家族の顔を見る」ということが全くできなくなった状態で、如何に精神的に支えになることができるのか、医療と介護、施設と在宅、利用者と家族、この繋がりを太いものにするために、私たち支援相談員に課されたものは非常に大きいと感じています。